

本校舎 幼小学部

「主体的に学び表現する授業づくり」

1 テーマ設定の理由

幼小学部は病弱・肢体不自由の児童（A組）と聴覚障がい幼児・児童（B組）が共に学んでいる。

幼稚部では日常生活の様々な活動を通して、身近な言語を身に付けられるように支援を行っている。その中でも「遊び」は幼児が気持ちを伝えたり体験したことを言語化したりしながら友達や教師との関わりを深めていく大切な場面だと捉えている。本研究では、遊びにおいて幼児が自ら表現できるような環境づくりについて考察していきたい。

小学部では新学習指導要領の移行期間であることから、令和2年度の全面実施に向けて「外国語活動・外国語科」について研究を進める。A組、B組それぞれの児童にとって外国語教育はどうあればよいかを探りつつ、児童がお互いに伝え合い、「楽しい」「もっと知りたい」「もっと学びたい」という主体性につながる意欲を引き出せるような内容や学習ステップについて考察していきたい。

2 研究方針

- (1) 遊びの場面に注目し、幼児が自ら表現できるような環境はどうあるべきか検討、実践する。主体性を引き出すための有効な手立てを明らかにする。(幼)
- (2) 外国語活動・外国語科において、A・B組合同授業での伝え合いや聴覚障がい児童の学びに着目した研修や授業研究を行う。児童の主体性につながる意欲を引き出せるような内容や学習ステップについて他校の様子や実践などの情報収集を通して進める。(小)

3 研究経過・内容

	内容（幼稚部）	内容（小学部）
1年次		
H30 6月	全体計画確認、学部ごとに具体的な推進日程、内容について確認	
6月	学部研修会「小学部の英語の授業実践について」	
7月	研究計画・幼児の実態把握	外国語活動の教材研究について
9月	遊びにおける目標・支援の確認	グループ編成・年間計画の検討
10月	保育実践、振り返り①	グループごとに年間計画作成
11月	保育実践、振り返り②	研修報告会・指導案検討
12月	外国語活動研究授業・授業検討会	
12月	1年次研究のまとめ	
2年次		
R1 5月	全体計画確認、学部ごとに具体的な推進日程、内容について確認	
6月	幼児の実態把握・目標設定	外国語活動について・年計確認
7月	保育実践（水遊び）、振り返り ※岩本先生来校、保育参観・指導	教材研究（教材づくり）・年計決定
9月	保育実践（小麦粉遊び）、振り返り ※岩本先生来校、保育参観・指導	研究授業①～指導案検討
	学部研修会「主体性を育む保育」講師：岩本智子先生（赤荻幼稚園）	
10月	東北豊研究会に向けた実践発表についての検討	研究授業①・授業研究会
11月	保育実践（新聞紙遊び）振り返り	研究授業②～指導案検討

1 2月	2年次研究のまとめ	研究授業②・授業研究会・研修報告
1月	2年次研究のまとめ	
2月	次年度研究に向けて	

4 研究実践

< 幼稚部 >

1年次

(1) 幼児の実態把握と支援の検討

ア 設定遊びにおける実態把握

※筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部「幼稚部教育課程（0歳～5歳児）」

イ 個人目標の設定

ウ 遊びにおけるおさえおきたい言葉の確認

エ 有効と考えられる支援の検討

(2) 授業検討

以下の観点で検討を行った。

- ① 幼児と大人との関わり方について
- ② 幼児同士の関わり方について
- ③ 場所・教材など物理的環境について
- ④ 時間的環境について

(3) 幼稚部研 東北聾教育研究会五部研

助言：大西 孝志 氏（東北福祉大学 教授）

- ・幼児期は環境設定が大事、ただし目指すところは具体物がなくても遊ぶことができるように育てること
- ・難しい言葉を使わないのではなく、意味が分からなくても教師が使ってふれさせておく、また、子どもに言葉を使う経験をさせておく。
- ・日本語の幅を広げるように（拡充模倣など）。
- ・障がいの多様化と共に家庭も多様化している。今日の前の子どもを今の条件で伸ばしていくこと。

2年次

(1) 保育実践と振り返り

ア 遊びにおける幼児の実態把握

※筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部「幼稚部教育課程（0歳～5歳児）」

イ 個人目標の設定（長期目標及び題材ごとの目標）

ウ 遊びにおいて有効な支援（環境構成を中心に）検討

(2) 学部研修会「幼児の主体性を引き出すための保育～これまでの実践から～」

講師：岩本 智子 氏（赤荻幼稚園 主任教諭）

- ・その子の困り感に寄り添う保育の工夫が必要
- ・職員同士で情報共有を
- ・保護者への丁寧な対応を
- ・子ども同士のつながりへの仲立ちを
- ・満足できる遊びの時間や環境の保障を
- ・一人一人が自信をもてる援助を

(3) 研修報告

ア 東北聾教育研究会（五部研）幼稚部会研究会

指導助言：森谷 留美子 氏（前山形大学大学院教育実践研究科 教授）

- ・伝えずにはいられないダイナミックな体と心の動きが生まれる活動の設定・工夫をすることで「相手に伝えたい」という気持ちを育む。

- ・「何を」「誰に」「どんな手段で」ということが必要であり、それらは信頼感が基盤となっている。発信する力、受け止める力を育む。
- ・教師は正しく（※正しい言葉・表現の意味）、分かりやすいお手本と、楽しく自然な模倣を。また、幼児の言葉（表現）にすぐに反応することで、伝わる喜びや伝えたいという意欲を育む。

イ 平泉町立幼稚園公開保育研究会

研究主題「共に育ちあう家庭・地域・幼稚園 健やかな心と体を育むために～幼児の60運動遊びプロジェクトを通して～」

- ・園全体として、毎日60分以上楽しく体を動かす中で多様な動きを身に付けるとともに、日常的な運動遊びの習慣形成を目指している。
- ・遊びがいくつか用意されていて好きな遊びを自己選択できること、用具や道具が作り込みすぎでならず、幼児自らがイメージを膨らませることができることなどの環境構成が幼児の主体性を引き出していた。
- ・おたより、連絡ノート、自由参観などにより園の活動をタイムリーに発信することにより、園と家庭で連携して取り組むことができていた。

<小学部>

1年次

(1) 学部研修会 「支援学校における外国語活動の在り方について」

助言：安保 訓子 氏（元盛岡聴覚支援学校副校長）

- ・今日はこの言葉（単語や文法）を身に付けさせたいという思いをもって教材を準備する。視覚的に分かりやすく手書きで良い。また想定できる様々なカードも準備しておいてチャンスがあったら出せるようにしておく。
- ・健聴の子ども達と同様にはできないけれど聴覚障がいがあっても子ども達はやりたい気持ちをもっている。発音を聞き取ることは難しいが片仮名を手掛かりに学ぶことはできる。
- ・NS（ネイティブスピーカー）を活用して英語の正しい表現を確認すると良い。NSがいない場合も中・高等部の英語科の先生に協力を求めていくと良いと思う。
- ・英語だからとアメリカの手話を学ぶことではない。必要なことは言葉が通じなくても伝えたい、伝えようというコミュニケーション力である。

(2) 研修報告会

ア 小学校外国語中核教員研修会

- ・「読むこと」「書くこと」が重要視された。大文字・小文字とも「読める」「書ける」ことの定着を図る。十分に会話した英語表現を「書き写す」活動。
- ・言語活動を授業の中心に据える。（「親しむ」だけではない）
- ・高学年では実際のコミュニケーションで活用できる基礎的な技能を身に付けさせたい。
- ・移行期間の時数は各学校に任されているため、H31年度までは中学年50時間、高学年70時間実施しなくてもよい。しかし、本格実施になったときに学習内容が突然増えて大変になることが予想される。そのことを踏まえて各校外国語活動の時数や内容を考えて欲しい。

イ 英語が好きになる学校づくり事業公開研究会（平泉小学校）

- ・外国語活動の時間だけでなく体育や道徳、社会でも取り扱った。そのためには教科同士の単元を合わせるなどの調整が必要になってくる。
- ・JET（英語教育推進員）が配置されており、児童への促しや、アクティビティの見本など担任のサポートをしている。
- ・総時数を増やして外国語活動の時間を確保している。

ウ 山形県立山形聾学校公開授業研究会（小学部6年外国語活動）

- ・外国語活動で取り上げる内容について、総合学習など他の教科とも連携をとり話題の内容を深めている。
- ・手話や指文字は使わず、細かな発音も重視している。アクセントに手拍子を付ける。
- ・発音で強いところは赤、弱いところは青など、教材の提示にも工夫をしている。
- ・ルビの振り方など英語の基本事項について中・高等部の英語の先生の協力を得ている。指導法の連携がとれているため、中学部へ進学したときにも学習の入り方がスムーズになる。

(3) 年間計画の作成

- ・来年度の外国語活動を4つに分け学習グループごとに作成

(4) 授業研究会 ○は良かった点、●は課題、△意見やアドバイス

単元名「Lesson 9 What would you like? ランチメニューを作ろう」

対象学級 小学部5年A組・6年B組

目標・丁寧な表現を使って、欲しい物を尋ねたり答えたりすることができる。

- ・相手が欲しい物を聴きとろうとする。

○子ども達が教材を手掛かりにして自信をもってやりとりしていた。

○授業の流れが提示してあり、見通しをもって授業に臨むことができていた。

○学習の導入の歌を、自信をもって楽しそうに歌っていた。その後の学習への入り方がスムーズになっていた。ルビ付きの動画の活用が良い。

●A組児童とB組児童ではメインとなる活動が違ってくるために共に学習することはメリットもあるが課題もある。(A組児童は聞く・話す、B組児童は見る・書く)

●NSの先生の活用について。

●めあての設定が明確でなく、最後に少しずれてしまった。

△発音のルビをいつ取ったら良いか。中学部・高等部では基本的には付けないが、生徒の実態に応じて必要があれば付けている。

△新学習指導要領について。深い学び、対話的、主体的な学びがこれから目指していくところ。また、子ども達が思考する学びができるように支援を減らしていくことも考えなくてはならない。

2年次

(1) 学部研修会

研究1年目は、外国語指導に関わる研修会や学校公開に参加した。また、対象児童に対応する年間指導計画を作成した。研究2年目は、この年間指導計画に基づいて授業実践を行い、学習グループ、指導法、指導内容について研究を深めることができた。(今年度の学習グループについては下記のとおり)

また、児童の実態に合った英語教材づくりも並行して行った。聴覚障がいを補うための教材、通常学級の児童のための教材など実態に合う教材づくりの大切さも感じた。

<学習グループについて>

グループ	①	②	③	④
障がい名	病肢	聴覚	病肢	聴覚
学 年	6年	5年	3年	3・4・6年
人 数	1人	2人	1人	4人
学習進度等	学年対応	学年対応	学年対応	学習言語に配慮を必要とするため内容を精選して実施

(2) 授業研究会

ア 単元名「What time do you get up? 一日の生活」(We Can!1: 5年生用教科書)

対象学級【学習グループ②】 5年B組

目標・日課や頻度を表す表現を聞き取ったり、カードのルビを見たりして発音することができる。

- ・Do you ~? を使って、日課について質問したり、答えたりできる。
- ・頻度を表す表現を使い自分や友達の日課について伝えようとしている。

<良かった点>

- ・児童同士が関わり合っている対話のある活動がとても良かった。
- ・NSが入ることで児童の聞き取りや発音が良くなっている。もっとやり取りを増やしてもよい。

<改善点>

- ・NSの活用の在り方・効果的な活用場面を検討する。
- ・複式グループで学習する場合、どの英単語や表現を、どの学年で指導するべきかが分からない。年間指導計画の吟味が必要である。
- ・活動の必然性を意識した授業づくりをする。
- ・児童のつぶやきを生かして授業を展開できるとよい。

<検討事項>

- ・5・6年生の外国語活動は、来年度から教科として本格実施になるため、評価の在り方を検討する必要がある。
- ・「書く」指導をどこまで行うか。

イ 単元名「She can run fast. He can jump high.」(We Can!1: 5年生用教科書)

対象学級【学習グループ④】 3・4・6年B組

目標・動物の名前や動詞を日本語と英語を対比させて理解することができる。

- ・Can you ~? の表現を使って、質問したり、答えたりすることができる。
- ・自分や動物の「できること」「できないこと」を考えることができる。

<良かった点>

- ・ウォーミングアップ、アルファベットの練習、歌など、どれも楽しんで取り組んでいた。歌ではリズムを合わせる工夫があり、児童の意欲を高めていた。
- ・クイズ予想のアクティビティー設定で、対話活動に必然性があった。
- ・英語指示が分かりやすく、いつも同じ言葉で統一されていて理解しやすい。
- ・T1は進める、T2・NSは発音を伝えるという役割分担が良い。
- ・児童が注目しやすいように、発音を聞かせる教師の位置を工夫してよい。
- ・児童の実態に合わせた教材や指導が良い。
(絵、表情の絵、文字の色分け、手話は日本語、強く発音するのは太字など)
- ・情報部の先生の協力により、補聴援助システムロジャールの2台使いが可能となった。マイクもプラスし3台使用も可能で、今後NSも含めての効果的な使用が可能である。

<改善点>

- ・ペアワークはパターンプラクティスで英語に十分慣れさせてからが良い。
- ・学習したフレーズを用いて、自分や身近な人について話す場面を設定するとより理解が深まり定着するのではないか。

<検討事項>

- ・教材に絵を入れすぎると文字を読もうとしないなど、聴覚障害の児童の実態を考慮して使用する教材を工夫する必要がある。
- ・「書く」活動をどう盛り込むか。
- ・複式重複学級指導の指導計画や目標の設定はどうあればよいか。

(3) 研修報告会

- ・東北豊教育研究会(五部研) 小学部会研究会への参加

5 成果と課題

< 幼稚部 >

(1) 成果

本研究では「遊び」を中心に保育実践と支援の在り方の検討を行った。一人一人が遊び込めるような環境づくりをすることで、伝えたい思いが膨らみ、身振りや音声などの自分にできる方法で表現しようとする姿を引き出すことができた。さらに、遊びでの関わりの深まりから、日常生活においても教師や友達との関わりを楽しむ場面が増えてきた。有効であった手立てとして以下の点が挙げられる。

- 提示する教材・教具・遊具を厳選することで、じっくり素材の感触を味わったり自分なりの遊び方を考えたりする姿を引き出すことができた。(環)
- 道具の精選によって、物の貸し借りをする場面が生まれ、幼児同士のやりとりを促すことができた。(環)
- 友達の遊びの様子に注目できるように遊び場の配置を工夫することで、友達をまねたり遊びに加わったりして遊び込む姿が見られた。(環)
- 活動を繰り返したり、前時と同じ遊具や教材を用いたりすることで、見通しをもち、安心して取り組むことができた。(活)
- 振り返りの中で、自分のことだけではなく友達の様子も音声言語や手話で発表することができた。(活)
- 教師が積極的に遊びに加わることで、様々な遊び方や友達との関わり方・伝え方のモデルとなり、遊びを深めることにつながった。(働)
- 遊びの流れを止めずに、幼児の気持ちに寄り添うことで、幼児の主体性を引き出すことができた。(働)
- 反省用紙を回覧し、毎時間の保育の振り返りを行った。教師間での共通理解を図ると共に、幼児の様子を受けて日々改善を加えることができた。(働)

(2) 課題

- 教師の声の大きさや話す速さに気を付けること、教材の工夫をすることがさらに求められる。(環・働)
- 遊びに出てきた言葉の定着を図るために、個々の幼児に合わせてさらに言葉の学習を深めることが必要である。(活・働)
- 遊びの流れを止めずに、幼児に言葉を使う経験ができるような教師側の働き掛けが必要である。(働)
- 幼児同士の関わりを促すことができるように、教師が遊びに介入せず意図的に引いて見守るときも必要である。(働)

※環：環境構成 活：活動構成 働：教師の働き掛け

《2年間を総括して》

幼稚部の構成や個々の実態が年度ごとに大きく異なる中で、遊びにおける環境づくりに焦点を当てて保育実践に取り組んできた。教師との信頼関係をもとに伸び伸びと遊び込む姿がみられるようになり、幼児同士が関わる場面も少しずつ増えてきているものの、まだまだ十分とは言えない。来年度も2名の新入生を迎える見込みであり、どのようにして友達との関わりを広げていくかが今後の課題である。

< 小学部 >

(1) 成果

1年次は指導内容、指導方法、年間指導計画を検討した。また、外部講師による研修会も実施し、学部全体で外国語活動の理解に努めた。

2年次は、1年次で作成した年間指導計画をもとに、通常学級と重複学級の2つのグループで研究授業・授業研究会を実施した。来年度からの外国語活動の本格実施に向けて、研修や授業研究を重ねることで実践的な内容や方向性を学部内で共有

することができた。成果については以下の点が挙げられる。

○児童の実態に合わせた学習内容、独自の教材作成、学習グループ、年間指導計画について具体的に検討することができた。

例) ・単語カード

聴覚障がいを補うため、文字+絵+片仮名のルビ+日本語の意味

(通常学習グループでは絵ははずす) など

○NSやボランティアを活用し、ネイティブな発音に触れながら、学習を進めることができた。

○学校公開や研修会へ参加し、外国語活動の進め方や指導方法などを共有できた。

○補聴援助システムロジャールのインスパイロ同士を同期させることで、より多くの声を聞くことが可能となり、「聞く」学習活動に対して有効活用ができるようになった。

(2) 課題

1年次は障がい種で分けない学習グループをつくり、仲間がいることでの学習効果はあった。しかし、「聞く・話す」が学習の中心となるA組児童と「読む・書く」が学習の中心となるB組児童が同じ学習課題で学習することは難しい面もあった。

2年次は、障がい種で分けた異学年合同の学習グループと学年対応の通常学習グループでの指導を行った。「聞く・話す」学習が中心で、教え合いや獲得語彙のレベル差はあるが「楽しい」「話したい」といった意欲的な学習の様子がみられた。しかし、以下のような課題も見えてきた。

○学習グループをどのようにすべきか。

○集団での学習効果はあるものの個々に合う学習課題設定に難しさがある。

○異学年集団や重複学級の場合、実態に合わせた学習内容の精選や軽重があり、中学部とのつながりも考えた年間指導計画をどう組み立てるかが課題である。

○個々の評価をどう進めていくか。

○紙やカードなどの提示教材が不足しており、授業ごとの教材づくりは担当教員の負担が大きく、また個々の英語スキルアップも求められ、学校全体としてもどう進めていくか検討が必要である。

○外国語活動の時数が増えた際のNSや外国語ボランティアの確保が難しい。

《2年間を総括して》

来年度の本格実施に向けて、学部内で学習グループについて検討し、指導内容や年間指導計画について再度見直したい。また、外国語活動から外国語への移行期の指導内容についても指導もれがないよう指導者同士で確認し進めていく必要がある。

【幼小学部全体を通して】

幼児児童が「主体的に学び表現する授業づくり」を学部テーマとして、2年間の研究に取り組んだ。発達段階や障がい種など実態は幅広いが、オリジナル教材の活用や教師のモデル提示など、幼児児童にとって分かりやすい授業を目指して授業改善を図ることで、「楽しい」「できた」「もっとやりたい」という意欲を引き出すことができた。今後も、魅力的な授業づくりに努めると共に、幼小接続の観点や中学部を見据えた系統性のある学びを意識して、日々の授業実践に取り組んでいきたい。

6 参考文献

<幼稚園部>

- ・筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚園部「幼稚園部教育課程(0歳～5歳児)」
- ・『ワクワク!ドキドキ!が生まれる環境構成』 ひかりのくに